
Aggressive War

藤本 泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A g g r e s s i v e W a r

【Nコード】

N 9 5 7 3 Z

【作者名】

藤本 泉

【あらすじ】

2024年、世界が終末を迎えた時世界中がアグレッサーと呼ばれる地球外生命体に襲われ、滅びを迎えようとしていた。これは、滅びと希望の物語。

（追記 主人公が周りから褒め称えられるような物語しか受け付けない方は、ブラウザバックすることを推奨します。）

プロローグ 0 話（前書き）

面倒臭い言い回しが多いかもしれませんが、気軽に読んで頂けると嬉しいです。

プロローグ 0話

二〇二四年九月五日午前三時二十四分（グリニッジ標準時刻）
世界主要都市アメリカ合衆国が、正体不明の生命体「アグレッサ
ー」によって占領されるという事件が起きた。

どうして、そんな事態に陥ったのか？

私は事件の謎について、長年追いつけているしがないライターだ。
事件発生から数年、数多くの資料書物を漁り、数多の研究機関を訪
れ、必要とあれば戦火の中でさえ飛び込んできた。だが、その苦労
は虚しく、この記事を各一週間前までは、先の見えない謎に半ば絶
望を覚えていた。

だが、この記事を書く一週間前とある情報が私の耳に届いた。

私の噂を聞きつけてか、有力な手掛かり持つ者が現れたのだ。私は
直ぐさまアポを取り次ぎ、情報提供者が暮らしている日本の首都で
ある東京へと足を運んだ。

そこで私を出迎えたのは、独特な雰囲気を出す四十過ぎの男
性であった。彼は今さっき体験してきた出来事を話すように、私に
語って聴かせた。

事件発生から遡って十年前。

アメリカワシントンD・C州に位置し、世界最大規模を誇るアメ
リカ航空宇宙局。彼はその一研究者として務めていた。膨大な仕
事量に普段から慌ただしい毎日を送っていたらしいが、その年の八
月二日だけは別格だった。【NASA】にいる誰もが自身の仕事よ
り、たった一つの結果を優先した。

無人宇宙探査機ボイジャー一号が、ヘリオポーズから脱出する瞬
間を迎えようとしていたからだ。

ヘリオポーズとは、太陽風が星間物質や銀河系の磁場と衝突し、
完全に混ざり合う境界面である。端的に言えば、宇宙空間の境界線

上を表す用語である。そして現在、地球から最も遠い探査機であるボイジャー一号は、太陽系を飛び越えた先へと進もうとしていた。誰もが、人類の新たな一步を見ようとしていたからだ。

彼もまた、その大勢の内の一人に過ぎなかった。眼前に鎮座する超大型モニターを、一心不乱に見つめ続けていたのだと言う。その時は、誰もが成功の期待と失敗の不安の狭間で揺れていた。

だが、問題は発生した。

突然、周囲が騒がしくなったと思い、近くにいた同期に話し掛けようと歩み寄ったところ、鼓膜が破れそうなぐらいの甲高いアラーム音が鳴り渡った。それが二級緊急非常事態を知らせる警報であることを理解するには時間は要さなかった。

原因は直ぐに、彼の耳にも入った。

ボイジャー一号の損傷だ。

正体不明の物体と激突し、機体に多大な損傷を負っており、その機能を完全に停止したとの連絡が入ったからだ。

だが、ここで考えて欲しい。

ボイジャー一号にもまた、周囲を索敵する様々なセンサーが取り付けられていた。というのに、そのセンサーが反応しなかったという不可思議な現象に。

そして、事件発生から十年後。アメリカ全土を包み隠した謎の浮遊物体とアグレッサの関係性について。

その時、私は、彼が伝えようとしていたことの意味を理解した。彼はこう言いたかったのだろう。この三つの事件は、全く関係ない出来事ではないのかもしれないということを。

ボイジャー一号は事件発生の十年前、既にアグレッサーと接触していたのではないのだろうか？

偶然にも、彼等の宇宙船が接触した探査機を破壊し、十年の歳月を経て生命維持が可能な地球へやってきたのではないだろうか？

そして、地球を占領したのではないのだろうか？

推測の域を出ないこの疑問を解明するために、私はこれからも調

査を続けようと思う。

(二〇三五年に死去した仁田氏の遺した日記より抜粋)

不穏 1話

仁田結衣は、今までに何度も読み返し、皺の出来た古びた雑誌をそつと閉じた。この雑誌には、一年前の事件で他界した父のことが記載されていた。父親はフリーのライターで、アグレッサーと呼ばれる地球外生命体を追いかけていた。

今から十年前、アメリカロングアイランドにて突如出現した正体不明の浮遊物体。それは地球に地球外生命体が訪れたことを示していた。ただ、彼等が乗ってきたのはマンガや洋画等に存在するような円盤の形状ではなく、意識を持った機械の集合体だった。

アグレッサーの宇宙船は、アメリカ全土を包み隠すほどの体積があり、当時のアメリカは太陽が当たらない暗黒世界と化していた。

そして、十年前の九月五日。

宇宙船より無尽蔵のアグレッサーが降下し、たった数時間の内にアメリカを支配するに至るといふ事件を起こした。

当時、国際連合の名の下に、世界中の国々が軍事力を集結させた。だが、アグレッサー陣営の圧倒的な戦力の前では、例え戦闘訓練を受けたプロの軍隊といえども、状況を巻き返せるだけの力は無く、ただ人間側の犠牲者だけが増え続けていった。

それから十年後。

世界の約八割がアグレッサーの支配下に収められ、日本も東京を除く全ての土地を占領された。

そもそもの話。アグレッサーの核を構築する金属、【水晶金属】は、地球上に溢れる鉄、銅、亜鉛から希少金属である金、銀、バナジウム等とは全く性質が異なる。

水晶金属は耐久性も優れていることながら、何よりも注目すべき点は、人間で言う所の言語機能、神経を兼ね備え、生命維持活動を行うことを可能にする意思を持った金属ということだろう。自律的な活動は勿論のこと、ただ闇雲に暴れまわるのではなく、個々が目

的を持った行動を起こすのが確認されている。これは、人間でいう所の脳に近い役割を果たしていたのだ。

彼等がただ無能に、純粹に暴れ回るだけならば幾らでも手の打ちようはあったのだろう。しかし、アグレッサーは互いに情報を共有し、緻密な作戦の上で行動することにより、より現実性を増した侵略を可能にしたのだ。

そうして、十年経った現在。人類は、再び地球の支配権獲得の為に、アグレッサーと戦争を継続している。

現在の日本は、元々の少子化の影響があったのか定かではないのだが、人員不足問題が深刻化している。

特に人員の減りが激しいのは、生死の危険性が最も高いアグレッサーと戦う【ユニット】達である。そのような風潮があつてか、学生の中からアグレッサーと対峙する為、戦闘技術を学べる白羽学園が建設された。

仁田結衣もまた、白羽学園の第一期生として学園に通っていた。

「……あつ、もうこんな時間」

結衣は掛け時計を眺めると、時計の針は八時を過ぎていた。私がぼんやりしている間に、時間が大分過ぎていたようだ。いそいそと鞆に自作NPCとスマートフォンを突っ込むと駆け足で家から出ていった。

「はあはっ」

黒谷湊は荒い息を吐き出しながら廃都市を疾走していた。黒を基調としたファスナー式の上衣に、同色のカーゴパンツと厚底ブーツ。腰にはピストルベルトが巻かれ、背中にウージー、両手にはファイアセブンが握られている。

「相手はたった一人だ。回り込んで追い詰める」

誰かが声を張り上げた。

黒谷は即座にファイアセブンをガンベルトに収納する。

代わりにM67破片手榴弾を取り出すと、安全レバーに取り付けられているクリップを外すと、安全ピンの先をまっすぐに戻す。人差し指で安全レバーを押さえ込み、安全レバーを引き抜くと同時に、声の発生源へと向かって投げつける。

一、二、……五秒後。爆発音と共に、複数の悲鳴が聴こえてくる。同時に、腰に手を回してウージーを構える。安全装置を解除すると、姿勢を低くしたまま敵がいる方向へと駆け出す。

T字路を右折すると、敵の有無を確認するよりも先に引き金を引く。毎分六百発の発射速度で9×19？パラベラム弾が射出される。「うわあああつ」「があつああ」

丁度、Tの字を左折しようとしていた二人組に出会い、彼等が照準を自分に向けるよりも先に撃ち殺す。四十発の弾丸を撃ち切り、胸ポケットから弾倉を取り出して弾丸の補充をしておく。

今さっき倒した二人のうち、一人が自分と同じウージーを所持していた。もしやと思い、彼の所持品を探ると、換えの弾倉が出てきたので頂いておく。

黒谷は周囲の様子を探ると、無数の足音が至る方向から聴こえてくる。どうやら先程の奇襲で、敵側に自分の居場所が割れてしまったのだろう。

「……どうする。黒谷」

この場にある物、状況、自身の身体能力を考慮した上で、何か手はないか考える。

確か、一対多数の場合。ランチェスターの弱者戦略を活用できる筈だ。

狭い場所に逃げ込み、一対一の状況を作り出す事が勝利への近道なのだろう。

「いたぞ！ こっちだ」「オペレーションで敵を狙い撃て」

黒谷は敵から逃げるように逃走を始めるが、的確な判断で逃げ道を防いでいく。

大通りを走るのは危険だと判断し、建物と建物の僅かな隙間を見つける。迷うことなく隙間へと飛び込むと、いまさつき自分が居た場所に銃弾の雨が降り注ぐ。

手に汗握る恐怖を感じながら、走る速度を一層に早め、向かいの塀を乗り越える。

だが。

誠に運の悪いことに、塀の向かい側に偶然にも通り掛かった敵の姿があった。

一早く黒谷の姿に気が付くと、散弾銃のイズマツシュ・サイガ12を向けた。

（ ヤバッ ）

咄嗟に腰のファイアセブンを引き抜き、相手に向けて構えると、同時に引き金を引く。5・7？弾が着弾する直前に、相手の散弾銃が火を噴いた。

無数の破片が発射され、僅かな距離を詰める。

黒谷は覚悟を決め、両手をクロスして頭を覆った。

全身血塗れ状態で黒谷は、背中を壁に預けていた。

弾丸の大半が腹をめり込み、一部は突き破っている。あまり傷の大きさと痛覚が麻痺しているのが幸いなのだろう。止血剤で血は止めたが、大量の血を失ったことで目眩が襲い掛かり、平衡器官に異常を来している。こんな状態で敵に見つかれば……

瞬間、目の前をひとつの影が横切った。その主は一度通り過ぎようとしたようだが、黒谷の存在を認めると、足を止めてこちらに振り向く。

「 見つけた 」

口が三日月のように吊り上がり、慢心の笑みを浮かべていた。

そいつは仲間を呼ぶことをせず、ゆっくりと一步を踏み出しながら近付いてくる。

その悠長な時間が恐怖心を刺激してくる。手に持ったCZ75S

P 01が鈍く光る。

追加マウントブロックにはバヨネットナイフを装着したタイプであるらしい。

そいつは俺の首を掴み、ナイフへと近づける。ナイフの照準を俺の右眼に向けると、勢いよく振り落とした。

「がああッア、アッ」

言葉にならない激痛が全身を駆け抜け、大量の血液が飛び散った。瞳が発熱源であるかのように熱を発し、次第に熱は全身に回っていく。

「もつとだ。もつと苦しめよ。命乞いしてみせろよ！ 僕の両親はお前に殺されたんだ。両親と同じ痛みを受ける。報いる。報いるよ」
何度もナイフを俺の身体に突き刺し、その度に血が飛び散り、ナイフは真っ赤に染まっていた。

俺は朦朧とする意識の中、もはや声すら発せられない状態へと追いやられていた。

そんな俺の状態を認めたのか、そいつは俺の頭に銃口を押し付ける。

「死ね。犯罪者め」

銃声が鳴り響き、意識が暗黒の世界へと堕ちていった。

複 2 話 (前書き)

主人公 s a g e 中

複雑 2話

『黒谷湊 フィードバック』

真横に設置されているディスプレイの文字を眺めながら、ヘッドギア形状の機械を外す。これはVR【バーチャルリァリティ】技術の応用であり、脳へ擬似五感情報を送り込むことにより、仮想世界へと入り込むことを可能にする。

だが……

「っ、う……」

右眼に強烈な痛みを覚え、思わず押さえる。

これは戦闘訓練用に改良された機械で、痛みがシャットダウンされておらず、痛覚フィードバックをもろに受ける。つまり、内部で過剰な怪我を負うと、実際には怪我していないのに関わらず、現実でも痛みが生じるという訳だ。

あの男に瞳を刺された右眼は炎で炙られたかの如く熱を持ち、視界の焦点が定まらない。

暫くの間は起き上がるのは無理そうだ。

黒谷はカプセルベッドに再び寝転び、熱の籠った息を吐き出した。

「……うわぁ、チキンが授業中に寝てる。気持ち悪」

黒谷に対してあからさまな嫌味を吐き出しながら、三人組の女子が近くを通り掛かり、訝しむように視線を三人組へと向ける。

「チキンと目が会うとか最悪。吐きそう」

「死ねばいいのに」

無茶苦茶な台詞を吐き捨てながら通り過ぎていった。

対して、黒谷の方は辛辣な言葉を気に介した様子はなく、右眼の調子確かめるようにパチパチと瞬きを繰り返していた。

「よし。大分マシになってきた」

黒谷は軽い動作で立ち上がると、ベッドから抜け出す。その際、二人同士の男女が何かしらの口論をしていたようだが、そんなもの

に關与する気は毛頭なく、担当教諭の元へと歩いていく。

「ミッキー」

某有名テーマパークを思い起こさせる名前を口に出す。

カプセルベッドの間を見回っていた教諭達の一人が黒谷の声で気が付くと、こちらに向かつて歩いてくる。

「クロ、もう試験は終わったのか？ あと、そのあだ名はいい加減に止める。黒服さん達がハハツ、とか言いながら私を追いかけくるだろ」

「一応、単位は取ったよ。あと、ミッキーも俺のことクロって呼んでいるし、おあいこってことで」

目の前で呆れ果てたような表情を浮かべている女性の名は三木東海。黒谷が所属する？Bの担当教諭でもある。

ちなみに、戦闘教諭中最凶の称号を持ち、その所為で周囲に男が寄り付かず、現在進行系で婚期を逃し続ける三十路である。

本当に残念な人だな。

と、心の中で哀れみの視線を向けていると、肉体的な脅しを受けたので、本当にやめておこう。命が幾つあっても足りない。

「で、私になんの用だ？」

「でさ、ミッキー。俺、ちよっと」

『？B担当教諭の三木東海先生。至急、一一一会議室までお越しください。緊急の用事があります』

まるで俺がエスケープするのを阻止するタイミングの良さに、呆気にとられてしまう。今回程、呼び出しの放送に憎悪を抱いたことはないだろう。

「クロ、悪い。話は後で聞いてやるから」

ミッキーは踵を返すと、そそくさと部屋から出ていった。

「一一一会議室ってここから無茶苦茶遠いだろ」

呼び出しの内容に関わらず、授業中にミッキーが戻って来ることは期待しないでおこう。

残りの数十分どうしたものか。もう一度、仮想世界に潜り込むの

も良いかもしれないが、またクラスメイトの連中が殺しに掛かって来るのも嫌だし。ジッと座っているか。

自分のカプセルベッドまで戻ろうとすると

後方から聴こえていた雑音が強くなり、黒谷は訝しげに声がした方向へ振り返る。

先程無視した男女の口論がヒートアップしたようで、周囲には野次馬が集まっている。

通常の感性の人間なら、何があったのか首を突っ込んだり、仲の良い人に聞きにいったりと、関与する行動をとるのだろうが

黒谷はとある理由で、この学園の全校生徒から憎まれている。そんな人間と仲良くしようものなら、その人もまた人間関係の輪から外され仲間外れにされる。だから、黒谷には甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる幼馴染や悪友といった類の人は存在しない。

だから、自分は騒ぎに干渉しないのが正しいのだろう。

黒谷は騒ぎの中心から避けるように、遠回りにカプセルベッドへと歩いていく。

だが。

「納得いかない。黒谷君、いない？」

その一言で、人の視線から外れるように歩いていた黒谷へ一斉に視線が集中した。

どうして自分の名前が呼ばれたか分からずにいた黒谷に、人混みを掻き分けるようにして中から一人の少女が現れる。

身長百五十センチ位で、小柄な体格、細い四肢から体重は大して重くはないだろう。褐色の髪は腰まで届くほど長く、首元にはトリードマークの黒マフラーを巻いている。

名前は仁田結衣だった筈だ。

整った容姿からクラスでも隠れたファンが多いのだが、何よりも彼女の人気を集めるのは、彼女自身が持つ才能だろう。

仁田は、黒谷とは違い戦闘ユニットではない。彼女は戦闘ユニットを支援するオペレーターだ。しかも、通常のオペレーターが安全

領域で状況を把握して支援するのに対し、彼女は戦域まで出向き、その場でオペレーションするという危険行為も余裕でこなせる凄腕の持ち主である。その利点は、敵からのジャミングやクラッキング等の妨害を受けることなく、正確な状況を把握し、司令や戦況を伝えること可能にできるという一点に尽きる。

つまり、彼女と【コミュニティ】つまり、チームを組むということとは、戦闘ユニット個々の技量に関わらず、生存確率が大幅な底上げをされるという訳だ。そういう理由から、未だに勧誘が後を絶たないという。

さっきの口論も勧誘かなにかだったのだろう。

「仁田さん。どうかした？」

思わぬ人から声を掛けられたことに同様にしながらも、冷静を装って返事を返す。

「ちよつと来て」

仁田は黒谷の手を掴むと、人混みの中心へと強引に連れていくとする。

「ちよつ、結衣」「死ね」「うわあ、やめなよ。結衣。チキンの手を掴むなんて」「仁田さんの手に触れるとは、万死に値する」

掴まれている側は俺なのに、皆、本当に酷いと思う。後、最後の奴はガンダム好きだと思いました。

憎悪、嫉妬、不快感を露わにする人混みを抜け、騒ぎの中心へと連れて来させられる。黒谷は仁田の手から逃れると、正面に立つ三人組の男女と向き合う。

左から、茶髪の東宮 冬至。金髪の藤乃沢 宗一。最後に黒髪の久木林 綸の三人組である。その三人組は、対人関係を放棄している黒谷でも面識がある、戦闘経験豊富な有力な生徒であった。彼等は黒谷の顔を見るや否や、嘲笑うような態度を見せる。

「チキンなんか連れて来て、どうするつもりだよ」

中央に立つ藤乃沢が、最初に嘲笑うような声を発した。それに同調するように、他二人も声を揃える。

しかし、仁田はその声を無視すると、黒谷に質問する。

「黒谷君。試験でオペレーターや他の戦闘ユニットに協力してもらった？」

「いや、一人で参加したけど……どうして、そんなことを？」

その質問に仁田は答えることはせず、納得いかない表情を三人組へと向ける。

「彼は一人で参加したって。それに引き換え、あなた達はどう？」

仲間内で協力して、オペレーターまで付けて、彼に試験開始直後から負かされれば、全責任はオペレーターの責任？」

仁田の言葉をそのまま受け取るなら、黒谷は初っ端に彼等を倒したのだろう。

そもそも、今回の試験内容は、仮想空間内で合計五人以上のキル数を稼ぐという内容だった。だが、俺は日頃の鬱憤を晴らす為、二十人近くを殺したので、生憎な話、倒した敵の顔は全く覚えていない。ちなみに、あまりにもキル数を増やしすぎたので、途中から黒谷討伐隊が出没して追われる羽目になったのだが、どうでもいいことだろう。

「うっ……でも、それも仁田がちゃんとオペレーションしていれば回避出来た筈でしょ！ オペレーターが見過ごしていたんじゃないの。自分のことを棚に上げないで」

「……未然に彼の接近を捉えきれなかったのは、私の責任だけど。それでも……」

確かに彼の言う通り、全ての責任をオペレーターに擦り付けて良い訳ではないが、逆にオペレーター自身に責任がないとは決して言えない。オペレーターはある意味、戦闘ユニット達の命を預り、彼等の選択一つで生死が決まるからだ。

ただ。

彼等はユニットを組んでいるということは、それなりに仲が良い。もしくは、有力な生徒同士、互いの実力不足を補っていたのだろう。しかし今回は、偶然にも俺が問題を持ち込み、仲違いさせるような

結果にしまったのだろう。なら、悪者になるのは俺だけでいい筈だ。悪意を俺一人に向けることで、今後、変に気遣いせずに済む。黒谷はこの場にいる全員に聴こえるように、大きく溜め息を吐き出す。

「チキン。お前、何のつもりだよ」

上手い具合に誘導に成功したようで、三人組の敵意が俺に向けられる。そもそも、彼等を仮想世界で殺したのは俺なのだ。苛立つていないはずがない。

「いや、面倒臭いと思って。強い戦力を保持するには、他人と協力するほかない。だけど、そんな力なんて、その他人と仲違いすれば簡単に瓦解するからさ」

「何を言うのかと思えば、そんなことか。そういうお前はどんなんだ？ コミュニティどころか、オペレーターすら組んでいないお前は？ ああ、悪かったな。組んでいないんじゃない、組んでもらえない、の間違いだったな」

その辛辣な言葉に、周囲の野次馬からも嘲笑が込み上がる。

本当に、俺の精神力が脆かったら自殺するレベルだろ。と、心の中で他人様の様に受け流す。

一々、まともに受け止めていると、単に辛いだけ。不必要に自虐的になってしまうのを防ぐには、醒めたままでいるのが一番良い。

だから、俺はこいつらに言っただけやる必要がある。

「オペレーターに頼っている時点で、底が浅いって気付けよ」

その瞬間、彼等の行動は思いの外早かった。

呆気に取られたのは、一瞬で、次の瞬間には藤乃沢が俺に掴みかかっていた。

襟元を掴み、脅すような体勢を取ろうとする。だが、怒りに思考が支配された奴など、意図も簡単にあしらえる。

相手の手が自分の襟元に届くよりも先に手首を掴むと、右脚で相手の左脚を払い、相手を自分の背中に乗せる。後は、一本背負いの要領で地面に叩き付ける。

「ぐああっ」

情けない声を出しながら、ぐったりと横たわる。

まずは一人目。

骨は折れていないだろうが、暫くは起き上がれないだろう。

続いて、背後から風が唸る。咄嗟に、右足を背後へと回し蹴りを放つと、確かな重量感と共に東宮を蹴り抜いた感覚が伝わる。

最後に 拳銃を構える独特な音が響く。姿勢を低くし、グロツク17を構える久木林へ容赦なく拳を叩き込む。拳は鳩尾へ寸分違わずヒットし、久木林は拳銃を手放した後、ほか二人と同様に倒れる。

時間にしてほんの数秒間の出来事。

野次馬は、何が起こったのか判らないという風に呆然と立ち尽くしていた。

「結局、仁田さんがいても、いなくても。お前達の負けだよ」

聞こえているか定かではないが、吐き捨てるように言葉を紡ぐ。後のことは知らない、と、黒谷は仁田に一瞥するとその場から離れていった。

責任 3話（前書き）

ちなみに、現段階ではこの作品はハーレム要素はほぼ皆無、純愛をテーマにした作品に仕上げたいと思っています。

これから先、女の子が出てくるとしても、恋愛感情よりも友情や絆といったものをテーマにしていきたいと思っています。

責任 3話

「ねえ、結衣、美咲。さっきのチキン。マジ、ヤバかったよね。あの藤乃沢と取り巻きを一瞬で倒しちゃうんだから」

本日最後の授業、仮想空間内での試験が終了し、手短にSHR【ショートホームルーム】が済まされる。クラス内では、試験に落第し補習に行く者、修練に行く人達、部活に行く人達や帰宅する人達、そして美咲や結衣、千歳のように教室内に残る幾つかのグループに分けられる。

「うんうん。私、藤乃沢達はあるまり好きじゃなかったから、いい気味だと思った。そもそも、結衣」

「ん？ どうかしたの」

美咲は、はあ。と呆れたように溜め息を吐き出し、まるで幼い子供に説得するような口調で言い聞かせる。

「前に、私、言ったでしょ。戦闘系ユニットは無駄にプライドだけは高いから、安易にコミュニティ組むのは止めたほうがいいって。今回は運が良かったけど、過去には流血沙汰になった事例もあるんだよ」

「そうそう、結衣はただでさえ人気が高いオペレーターなんだから、余計気を付けなくちゃ」

「うん、ありがと。美咲、千歳。藤乃沢君にコミュニティを脱退すること、伝えてきたから。今度選ぶときは、ちゃんと注意するね」
（それにしても、無理やり騒ぎに巻き込んだ形になって、黒谷君には悪いことしたかな？ あの後、お礼言う機会もなかったし……）

結衣は考え込むように、頬に手を持っていくとぼんやりと夕暮れの空を眺める。夕日が西の空へ沈みかけ、空を赤く染めている。

「って、そうだ。今日は、ぼんやりしてる時間はないんだった」

結衣はがたつ、と椅子を弾き飛ばすかの如き速度で立ち上がる。

「結衣。どうかしたの？」

「そんなに慌てて、もしかしてコレ？」

千歳は揶揄うように親指を立てる。ちなみに、小指は彼女のこと、親指は彼氏のことを示す。

「違う。今日はお父さんが亡くなって一年経つから。お墓参り」

結衣は鞆を掴むと、駆け足で教室から出ていった。

「そっか。あの事件から一年経つのか……」

黒谷湊。

彼は、東京都に在住する全ての人達から憎まれていると言っても過言ではない。そもそもの話だが、彼は最初から学園中の生徒達から憎まれていた訳ではない。むしろ、一年前では誰もが彼のことを褒め称えていた。私こと仁田結衣も、彼の噂は少なからず耳にしていたし、彼の常識を覆す力や前向きな性格はとても好感的で、学園では女子だけに限らず、男子、教師までもが彼のことを慕っていた。しかし、たった一つの出来事で、彼の全てが逆転してしまった。

一年前、私の父が亡くなるに至った事件。

東京へBランクのアグレッサーが侵攻してきたからだ。東の支配者【青龍】は、関東周辺地域を支配するBランクのアグレッサーである。

通常、アグレッサーのクラス付けは、支配領域の関係で決められる。

Gランクは、五十？単位に一つ。

Fランクは、百？単位に。

Eランクは、五百？単位に。

Dランクは、千？単位に。

Cランクは一万？単位に。

Bランクは五万？単位に。

Aランクは各国に一つずつ配置されている。

Sランクはアメリカ全土を覆う無敵艦隊の世界最凶のアグレッサーである。

つまり、地球表面積を約五億九百万？とすると、Gクラスは世界中に一千万体存在するということだ。

ランクが一つ上昇すれば、アグレッサーは段違いに強力になる。平均的な戦力を持つ戦闘ユニット一人では、Gランクを相手するのが精一杯で、Fランクが倒せれば天才と崇められるレベルである。三人から八人の学生コミュニティならば、Fランクを相手にすることは容易だが、Eランクを倒すことは難しい。もしも、Eランクを倒すことが可能なコミュニティは、実践力のあるプロとして十分やっていける。Dランクと対峙可能なコミュニティは、戦争最前線で戦えるだけの戦力を保持していると認められる。

そして黒谷君は……

彼は、過去にCランクを倒した経験が唯一ある戦闘ユニットだ。

詳しい話は知らないのだが、東京都支配権を持つアグレッサーを殺したのは、他でもない彼である。

だからこそ、青龍が襲撃した時、誰もが彼に助けを乞うた。Cランクをたった一人で倒せる実力者なら、Bクラスの青龍とも相対出来るのではないか？

そんな風に楽観していたのだ。

しかし、戦場の場に彼は現れなかった。

多くの人々の希望を打ち砕き、彼は忽然と姿を消したのだ。

結果。戦場は滅茶苦茶だった。青龍が放つ蒼の閃光が一瞬にして都市を焼き払い、人々を蒸発させる。建物は瓦解し、炎が至るところで燃え盛っている。民間人を逃がす間もなく、多くの民間人が殺され、私の父もその時、アグレッサーによって殺された。

それだけでなく、青龍に恐れを為した戦闘ユニットが敵前逃亡するという事態にまで発展した。被害は酷く残酷なものだった。

そんな悲惨な戦況の中、偶然にも幸運の天使が舞い降りた。

戦闘開始から一時間後。青龍が侵攻を止め、何故か後退してくれた

のだ。そのお陰で、東京が壊滅し、日本人が絶滅するといった最悪のシナリオから免れたのだ。

総人口百万人の内、十万人が死亡するという辛辣な現実が残った。建築物の被害も馬鹿にはならず、税金の取立ても厳しくなった。国民の間で不満が高まり、誰かに当たらずにはいられなかったのだらう。

黒谷君は、批判や憎悪の対象として格好の獲物とされたのだ。Cクラスのアグレッサーを倒したというのに、英雄なのに、末世に現れた救世主なのに、どうしてあの時。皆を見捨て、一人だけ逃げたのか？

臆病者　チキン。

他にも、多くの戦闘ユニットが戦場から逃げ出したというのに、彼だけが期待を寄せられるという、理不尽な都合で罵られたのだ。

戦闘ユニットが国を護るという責任を放棄し、逃げ出したのは許されることではない。しかし、それならば他の人達も同様の処置に然るべきなのではないのだろうか？　彼一人だけが、国民に目の敵にされ、親の仇敵として狙われ、子供を返せと慨嘆され、犯罪者として罵られるのは間違っている。

せめて、自分だけでも普通のクラスメイトとして接してあげたい。だから、明日会ったら今日は迷惑掛けたことちゃんと謝らう。で、助けてくれたことのお礼も言おう。

結衣は心の中でしっかりと決意しながらも、墓地を歩いていく。夕日が沈みきり、曇天が空を覆っていきより一層に暗さが増していき、昼間なら青く茂っている芝生は、今だけはとても冷たく感じられる。そこから一、二分程度歩くと、三十代の夫婦が泣きじゃくりながら、互いに俯いたまま帰っていくのを見かける。彼等もまた、親しい人を亡くしたのだらう。

続いて、十代　結衣とそう年齢の変わらない女子学生達がクラスクスと笑いながら帰って行くのを見た。このような場で笑うのは不謹慎じゃないのだろうか？　と、惘然としながらも先に進む。

今度は、中年のおばさん達と擦れ違う。彼女達は背後を振り返り、口元に手を当てて何かを話しながら去っていった。その後に通り返ってきた人達も似たり寄ったりな反応を示してるのに気が付いた。

結衣は、彼等の不自然な行動に違和感を覚え始め、早歩きで舗装された道を歩いていく。

巨大な石碑が設置されたある共同墓地が見えてきた。強度墓地の前には何十人もの人達が参列していた。しかし、参列者から少しだけ離れた場所で、不自然な人集りが出来ていた。

焦る気持ちを抑えながら、ゆっくりと近づき

そして、結衣は違和感の理由を知ることとなる。

「えっ！？ あれって……」

嘲笑 4話

結衣は衝撃的な光景に、呆然と立ち尽くしてしまった。

数人の大人が寄って集って一人の少年を袋だたきに行っているのだ。それも三十を過ぎ、人間として熟成した大人が、である。

そしてなによりも、袋だたきにされている少年に結衣は見覚えがあったからだ。

濃紺を基調とした白羽学園のスクールブレザー、結衣と同じ褐色の色素をした短髪。無駄な贅肉のない細身の身体つきに、歳以上に大人びて見える顔つき。

「っ、黒谷君!？」

気が付いた時、結衣は彼の名前を呼んでいた。

人の壁を掻き分け、彼の元へと駆け寄る。彼は衰弱しきった様子で、地面に倒れており、至る所に擦り傷や打ち身、切創が出来ている。

普段の大人びた冷静な態度からは想像も出来ないほど、今の彼は心体共に疲労していた。

結衣はどうするべきか対応に苦慮するが、このままこの場所にいることだけは良くないことは判る。彼の腕を、自分の肩に回して支えると、負担にならないように気をつけて一緒に立ち上がる。そのまま、再び人の壁を通り抜けようとすると、隙間を閉ざして逃げられないようにされる。結衣は苛立った声をあげる。

「何のつもりですか？」

周囲にいた大人達の中から、暴力に酔った中年男性が、結衣の前に立ち塞がる。

「君こそ、何のつもりだ？ 私がいつ何をしたというのかね。悪い者を成敗するのは、大人の役目だ。彼を置いて何処かに行きなさい」周囲の人達も彼の言葉に便乗し、そうだ、そうだ。と、鬱陶しい目で結衣を見る。

「私が彼を置いて行って、貴方達は彼に何をするつもりなんですか？ 結局、自分の中にある苛立ちを彼にぶつけるだけじゃないんですか！？」

結衣は苛立ちを抑えられず、感情的な口調になる。その光景が、周りにいた人達にとって滑稽に映ったのだらう。クスクスとした嘲笑が、耳にこびり付く。

「いきなり出て来て、何なんですか。あなたは！？」

中年男性と同年代らしき女性が現れる。黒の地味なワンピースにストッキングを着用していた。

「……私の大事な息子は……」

女性は、結衣に掴み掛かる様に歩み寄る。結衣の襟を握り締める、無理矢理に自分の傍まで引き寄せる。

「あなたが庇っている。そいつの所為で死んだのよ！！」

結衣は彼女の身勝手な物言いには憤りを感じるが、ここで暴れるといった暴力的な行動を起こしてはいけない。そうすることで、自分が目の前の彼等と何ら変わらないぐたらない者となる。熱の籠った頭を冷ますように、ポツリポツリと雨が降り始めていく。

「彼が何だつて言うんですか。例え、彼が臆病者だとしても、貴方達のしていることはただの犯罪です。いい歳した大人が、子どもに当たるなんて……恥ずかしいと思わないんですか？」

間違ったことは言っていない。例え周りに賛同者が居なくても、多数の意見に流され、自分の意見を持てない様な人間にはなりたくない。

結衣を掴んでいた女性は、顔を真っ赤にして憤慨する。右手だけが襟元から離されると、大きく後方へ引かれる。結衣は冷めた表情で、それを眺めていた。

このままジツとしていれば、彼女は結衣の頬を叩くだらう。結衣の実力から考えれば、一般人相手に遅れを取ることなど無く、それを止めることは容易い。だが、この場で必要とされているのは建前なのだ。

彼女が結衣を叩いたという 暴力的な行動に出た。それだけで、結衣は正当防衛を訴えるということも可能なのだ。

女性の腕が大きく振るわれ、空気を揺らしながら接近する。結衣は口内や舌を切らないように歯を噛み締め、衝撃に備える。

「……………ッ！！」

パンツ、と乾いた音が響き、直ぐにザーザーという雨音で掻き消される。

確かに何かを叩いた音が聴こえた。そして、今さっきまで彼女の行動、沸騰した頭から推測するに、結衣の頬を叩こうとしていたのは間違いない筈だ。しかし、いつまで待っても痛みが来ないのはどう説明すればいいのだろうか？

衝撃に備えて閉じてしまった瞼をゆっくりと開いていく。

結衣は、瞳に映る光景を認めた時。まず、こう思わずにいられなかった。

えっと、どちら様？

黒髪の少年が、結衣と黒谷の前に突如現れ、女性の平手打ちを止めていたのだ。

「ここにいらっしゃるを、暴行罪の容疑者として連行します」

彼の一言は、黒谷を袋叩きにしていた人達全員を戦慄させた。

だが、それも不意を突かれた一瞬の出来事で、同時に、結衣の時間と同じ嘲笑に似た声があがる。

「坊主。正義感で警察の真似事なんか止めておけ」

どうして？ と、言われれば簡単な話だ。

少年は、結衣と同じ年代の外見だったのが災いしたのだ。誰もが、子供のタチの悪い悪戯と決め付け、彼の言葉を信じようとしなかったからだ。

少年は嘲笑、馬鹿にされることに対して何も言わず、呆気にとられている様子もない。ただ周囲にいる大人達に対して、氷のように醒めた視線を送るだけである。

そんな中

「ちょっと、すみません。通らせてください。はい、はい。すみません」

人の壁の向こう側から、この一年の間で、結衣にとって聞き慣れた声が聴こえて来た。結衣はハツとした表情で、近付いて来る人物を認める。

「会社帰りに墓参りに来てみれば、結衣じゃないか」

目の下隈のある疲れた顔付きに、長年着た反動でくたびれたスーツ。口元と顎には少しばかりの髭が生えており、ツンツンと尖っている。まさに、会社疲れのサラリーマンの一般例を表したような姿。その姿には、大変見覚えがあり

「ふ、古川さん!？」

結衣の親戚であった。

陰鬱 5話（前書き）

一日遅れの更新です

陰鬱 5話

結衣は母親を早くに亡くし、結衣の肉親だった父親さえも、去年起きた事件に巻き込まれて亡くなってしまった。

結衣の両親は、別到大企業の資本家や自立できるまで不自由なく暮らせるだけの財産を遺したわけではなかった。途方に暮れた結衣を救ったのは、父方の弟の古川一樹だった。

古川妻子には、結衣と同じ年頃の息子が居たのだという。しかし、彼もまた去年の事件に巻き込まれて亡くなったらしく、そんな時に結衣が親無し子になったという連絡を受けたのだという。二人は息子を亡くした直後だったのもあり、親を亡くした結衣を引き取る話を二つ返事で承諾してくれた。

元々、二人は温和な性格から大変気さくな面倒見の良い人で、突然現れた結衣を暖かく迎え受け入れてくれた。結衣としても二人には数え切れない恩があり、若干申し訳なく感じる時もあるのだが、良い人ということだけはハッキリと言える。

ちなみに、先程は会社疲れのサラリーマンと表したが、実際の職業はサラリーマンではない。

「それにしても、祐介君は仲裁してくれてありがとね」

「いえ。僕は、当然のことをしたまでですから」

祐介と呼ばれた少年は、こちらと一瞥した後、一樹の方へと向き直る。

「さて、この人集りどうすべきか？」

古川一樹は、自身の胸元ポケットからホログラム型の携帯端末を取り出す。と、周囲の大人達に見せつけるように突き出す。

何もない空間に半透明のホログラムディスプレイが表示される。

『特殊自衛隊所属 古川一樹』

画面に表示されたのは、なんの変哲もない文章だった。白地の画面にデカデカと書かれた黒文字。スタイリッシュなんてへったくれもあつたもんじゃない、MS明朝体で書かれたシンプルな文字だった。

「では、僕も」

隣で、祐介がぼそりと呟くと、一樹と同じ携帯端末を取り出し、画面を見せつける。

『特殊自衛隊所属 東野祐介』

現日本政府の大まかな軍事体制について説明しておこうと思う。まず、理解し易いと思うが。権力の中心 主権を持っているのは、一人一人の国民である。そして、その国民の民意で決定されるのが衆議院と参議院、内閣である。ここで新法案や改訂法案を通すか通さないか、年間の税金の使い道など様々な事が決定されているのは知っていると思われる。一九四七年に日本国憲法が施行されてから、基本的な法案や主権に対する変化は見られていない。

ずっと続いてきた現状維持の風潮の中、たった十年の間で新たな局が設立された。

侵襲対策局。

通称IMO。略称前の正式名称が知りたければ、エキサイト先生に頼んで欲しいので、ここでは割愛させて貰う。

十年前、突如顕れたアグレッサーと敵対するため、防衛省に設立された局だ。ここは、戦争時の資金の遣り繰りや自衛隊幹部の選出が行われている。

そして自衛隊幹部である将官によって、佐官や尉官が任命され、順繰りに曹、士が決められている。自衛隊とは、これらを総括した組織を指す。

最後に、私達、白羽学園の学生的位置付けである。

この学園に在学する生徒達は、自衛隊の下っ端という立ち位置と

なる。つまり、自衛隊という組織に加わりはしないものの、自衛隊の仕事の一部を受け持っているという、下請け業者という訳だ。

これは噂でしか耳にしない話だが、一部の超絶的な実力を持つ個人に対して、国が特別なライセンスが発行されているという話を聞いたことがある。このライセンスは、その者の意思一つで、誰の命令に指図されることなく、独自の判断で行動できるという話だ。だが、実際にその許可証を確認したことはない為、本当かどうか定かではない。

現在目の前で発生している状況に話を戻すが、少子高齢化が進んだ日本では、一つの職業で幾つかの役割を併合している場合が多い。そして、それは「わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」という目的を掲げる自衛隊にも当て嵌る。現在の自衛隊は、本来の目的から離れた 街の治安維持という警察の役割も兼ねており、民間人を救助、もしくは犯罪者を逮捕することを許可されているのだ。つまり、古川一樹と東野祐介の二人は、黒谷に暴行を加えた全員に対して逮捕権を行使出来る。

「逃げる」

誰かが声をあげた。その声を引き金になったのか、その場にいた全員が一目散にその場から離れようと逃げ出す。

「全員に逃げられちゃ、困るよな」

一樹が携帯端末を二、三秒操作すると、彼を中心として半径五十メートルの円状に電撃が迸った。高さ二メートル程の電撃の壁が発生し、逃げ出そうとしていた人達はその場で立ち止まる。

「【高圧電流壁】まともに通り抜けるつもりなら、大怪我を負うくらいは覚悟した方がいい」

一樹は電撃の壁を抜けようとする人達に淡々と助言する。

「ちよっつ」「何だよ。これ」「俺、関係ないんで!!」

一樹によって突き付けられた言葉により、無理矢理にでも電撃の壁に飛び込もうとしていた人達が踏み止まる。

「じゃあ、全員捕まえるから。一応、逃げていた奴全員取り押さえ

て」

数分後、護送車が到着すると、誰一人逃すことなく皆連行されていった。

もしも赤色灯がなければ、普通のマイクロバスと変わらない外見をしている。その為、観光バスに乗り込んでいる光景に近い。

殆どの人が連行された後、その場には結衣と衰弱した黒谷が残されていた。

「結衣、大丈夫だったか？」

一樹が祐介を連れて現れる。結衣の傍にまで寄ると、心の底から心配している表情を見せていた。

「うん……大丈夫だよ。私は」

黒谷を一瞥すると、元氣のない返事を返す。

身体中の至る所に傷跡があり、箇所によっては思わず目を逸らしなくなる程、重症の傷もある。もしも、自分が彼のような傷を負ったなら、痛い、痛いと思っただけでは済まないだろう。

一樹も黒谷の傷跡を認めると「……そうか」と、微かに呟き、数秒の間、陰鬱な空気が場を支配する。

だが、それもほんの数秒程度の出来事で「さてと」と、一樹は気鬱な雰囲気吹き飛ばすよう、勢いよく立ち上がる。

「祐介君。その彼、多分証拠撮っていると思うから、俺の端末に送つていて。後、もう危険はないと思うけど、念の為に二人を家まで送ってあげて」

一樹は祐介を置き去りにすると、一人踵を返して去っていた。

友情 6話（前書き）

いつもより長いww

早く妹ちゃん出したい

あと、何気に前向きなサブタイになりました。というか、今までが重すぎたww

友情 6話

HONDA制作自動車アコードツアラー。二〇三二年に発売され、二〇〇八年に発売された初代から数えて五代目、アコードワゴンから数えるなら九代目のワゴン車となる。

結衣と黒谷の二人は、そのアコードツアラーの後部座席に座っていた。祐介は一樹の命令通り、二人を家まで送る為に自動車を運転してくれていた。

初めて彼を見た時、どう見ても祐介の外見年齢は十八歳未満にしか見えないと思った。今日と鼻の先に見えている後ろ姿も、一度認識してしまうと同年代にしか映らない。

某学園都市のピンク色の髪をした先生ならいざ知らず、現実にもそのような特殊人物がいる訳はない。だからこそ実際の年齢も、結衣や黒谷の同年代であろうと踏んでいる。

つまり、祐介は十八歳未満にも関わらず、自動車を運転しているということになる。

もしも、二十年前の道路交通法ならば、警察に見つかるとや否や五月蠅いサイレンを鳴らされ、車を止められた後に三人揃って事情聴取を受ける羽目になる。いや、そもそも話、彼が警察代わりなので権力を振り翳せばなんとかなるかもしれないのだが……。

しかし、現在の私達は捕まることはないだろう。何故なら、二〇二八年に道路交通法の改正が行われ、普通自動車の取得年齢が十八歳から十六歳へ引き下げが行われたからだ。

同時に労働基準法も改正され、一六歳以上になると一般の社会人として認識され、十時以降の労働が可能になった。これは際限のない少子高齢化の余波によるもので、若い世代の労働者を増やそうという考え方からきているのだろう。

事実、改正法案が施行されてから、深夜での学生のバイトが多々見掛けられるようになった。しかし、実際の所。この政策はあまり

良いものとは言えない。深夜のバイトが学業に影響し、近代の学力低下が問題視されているのだ。また、十六歳以上の学生が深夜に外出することで、若年層の犯罪が急増しているのも理由の一つである。結果、事件解決の為に人員が削られ、人員が足りなくなると言う堂々巡りをしているのだ。

ちなみに私は、普通自動車免許は取っていないものの、普通自動車二輪車免許を今春に取っている。ただ、白羽学園への通学方法は電車と徒歩なので、教習場を卒業して以来、乗り慣れていない為、今は乗れるか怪しいところだ。

結衣は取り留めのないことを考えながら、隣で眠る黒谷の顔を眺めていた。骨が折れるほどの重症ではなかったが、至る所に怪我を負っている。祐介は結衣を家に送り届けた後、彼を病院にまで連れて行ってくれるらしい。

ただ怪我を負うことにより、不必要にも身体に熱が籠もっているようだ。証拠に、額には数滴の汗が滴っており、辛そうな吐息を繰り返している。結衣は彼の額を拭おうと、手持ちのハンカチを取り出そうとする。

「えっと、仁田さんでいいですか？」

運転席から落ち着いた声が掛けられ、結衣は手を止め、祐介へと視線を移動する。

「祐介さん、どうかしましたか？」

祐介は、照れ臭そうに苦笑する。

「いえいえ、呼び捨てで構わないですよ。僕は色々あって、この仕事やらせてもらっているだけなんです。それに僕、お二人と同年なんですよ」

「やっぱり、そうだったんだ。」

「祐介君、見た目が凄く若いから。もしかしたらって思っていたんですけど」

「ええ。中学卒業と同時に、自衛隊に入らないか？　って、スカウ

トされたんです」

「え……ス、スカウトツですか？ それって 本
本当に凄いことなんじゃ……。」

当たり前の話だが、ただの中学生や少し武芸に秀でた程度の人へ、
自衛隊が勧誘に来ることはない。その程度の人員を集めた所で、
戦場では全く役に立たないことは自明の理だ。

だからこそ大半の学生達は、自分にはない技術や経験を身に付け
る為、白羽学園へ進路を希望する。結衣もその他大勢の一人である。
祐介君と結衣や学園の皆では、比較にならない実力差があるのだ
ろう。

周囲から非難の声を受けた時の冷静さや余裕の在り方は、どこか
黒谷君に通じる点がある。彼も周囲の人々から嘲笑の声を浴びよう
とも、それに怒り狂うような事はせず、冷静に対処していた。見た
目は 全く違うけど、やっぱり何処か二人は似ている。

「って、言っても。二ヶ月前にやっと研修を終えたばかりの超新人
ですけどね」

「研修って、どんな感じのことをしたんですか？」

このままいけば、将来的には自分も自衛隊に所属することになる
つもりだ。自分は戦闘ユニットとは違うが、どのような訓練を行な
っているのか知っていて損はないだろう。

「白羽学園も実施している 東京周辺、安全範囲圏外での実
戦訓練ですよ。ただ白羽学園の場合、訓練時間が数時間程に制限さ
れているんですよね」

白羽学園のカリキュラムはVR機器での仮想訓練を主としており、
その理由は幾つか挙げられる。

まず、一つ目に物理的危険が低いことが関係している。学園のV
R機器は戦闘用にチューニングされており、痛みがフィードバック
するように設計されている。それは負傷に伴う痛みの耐性を付ける
為に必要な措置である。

しかし、仮想世界で怪我を負ったからといって、現実の身体が負

傷した訳ではない。感覚が鈍る、熱が籠もるといった弊害が生じるものの、少し経てば痛みも引き、普段と変わらぬ生活を送ることが出来る。

二つ目に資材の無駄な浪費を防ぐ為である。弾薬や爆薬等、資材自体は国が支給してくれる。だが、学園の全生徒が訓練の為に消費し続ければ、支給が間に合わなくなるのは自明の理である。そこにVR機器ならではの有用性が存在する。仮想空間内で弾丸や銃を創り出せば、訓練も弾丸の消費もどちらも解決するというわけだ。

だが、仮想空間内ばかり戦闘訓練をするだけでは、実際に襲撃にあつた時、全く対応できないという事態が起こりうる。その為、一年生の後期から、月に一度だけ安全範囲圏外へと趣き、実戦経験を積ませているのだ。

「うん、そうだね。生命の危険が、及ばない程度に考慮されているから……」

事實は、もっと悲惨だ。

いつ襲われるかもしれない不安や生死を掛けた緊張感は、予想する以上に重圧を掛けてくる。最近では随分マシになったものの、初めてこの訓練を受けた時には、制限時間を迎える前にリタイヤする人が続出した。例え、時間を考慮されていようと、私達自身の技術や精神が未熟過ぎるのだ。今年の一年生はまだ体験したことはないのだが、彼等もまた自分達と同じ道を辿ることになるだろう。

「やっぱり、そうですね。その点、自衛隊では訓練期間が長く設定されていて、最短で一週間。最長で一ヶ月に及ぶんです。一種のサバイバル訓練って感じだと解りやすいかな」

「って事は、その間の食料や拠点を全部自分達で？」

「ええ、携帯食料も支給されるんですけど……それだけじゃ絶対に足りないんです。ですから、先輩方から食べられる雑草や廃屋を活用した拠点造りを教えて貰いました。本当に毎日を生き抜く為だけに、知識や技を必死で学んでいたんですよ」

結衣は祐介から黒谷へと視線を移しながら「凄いなあ……」と、

誰にも聴こえないような小さな声で呟く。

丁度、その時。

眠っていた黒谷が、不自然に身体を揺らす。

ゆっくりと瞼を持ち上げると、二、三度瞬きを繰り返す。頭を左右に数回振り、結衣が隣にいることに気付いたのか、振り向いて首を傾げる。

「あれ、仁田さん？……どうということ？」

説明を要求する。と、言いたげな表情を浮かべる。

「黒谷君、おはよう。どうっていわれても……こっちが訊きたいんだけど。まああなたにより、そんなに急に動いて大丈夫？」

「へ……ッう、痛ッ」

起きた直後だからか、自分がどういった状態なのか把握していなかった。無理に身体を動かそうとした所為で、全身に痛みが駆け抜けて声にならない痛み悶絶する。

よく見ると、自分の身体に包帯やガーゼ、絆創膏で手当てをしてくれていることに気が付く。恐らくは、二人が応急処置してくれたのだろう。と、前向きに考えると、今の状況は悪いものではないらしい。

考えたくもないことだが、最悪、何処かに監禁される。もしくは、殺されるといった可能性も挙げられたのだ。それに比べれば、百倍良いだろう。

「黒谷さん、平気ですか？」

「本当に大丈夫？」

ボンヤリと考え込んでいた所為で、余計に不安を煽ったらしい。祐介と結衣が不安そうにこちらを覗き込んでいた。

「平気、平気。慣れてるから」

右手をヒラヒラ振って誤魔化そうとするが……アレ？　なんで、動かないんだ？

ちよつと、待てよ……なんでないんだ？

「どうしたの？」

怪訝そうな表情を見せながら、左手で右腕の二の腕に何度も触れる。その様子を不振に思ったのか、結衣は今さっきの黒谷よろしく、首を傾げていた。

「えっと」

言って構わないんだろうか？ でも、言わないと話進まないしな

あ……

「……？」

「先に言っておくけど。同情とか要らないし、あんまり周りの人にも言い触らさないで欲しいし、気持ち悪いとか思わないで欲しいし、知っているなら教えて欲しいし」

グダグダと建前を並べる黒谷に苛立ったのか、結衣は顔を真っ赤にして怒る。

「もう、何の話しているのか分かんないよ！！ 同情もしないし、言い触らしたりもしない、気持ち悪いとかも思わない。あと知っているなら、ちゃんと協力するから！！」

「全くもう、そんなに私、信用ないかな……」と、結衣は不貞腐れたようにボヤつく。

「えっと、ゴメン。じゃあ、言うけど……」

ごくり、と前と横から唾を飲み込む音が聞こえる。

私の話を真剣に聞きなさい。的なノリじゃないんだから、適当に聞いてもらわなきゃ恥ずかしいんだけど。まあ、いいか。

「腕に着けてたリストバンド。何処にあるか知らない？」

「えっと……リストバンド？」

「リストバンドですか？」

二人共心当たりがないのか、首を傾げている。

「何ていうか……そう、真っ白の布を輪っかに繫いだみたいな感じのやつ。右腕の二の腕辺りに着けてた筈なんだけど……。無くなっているみたいで」

結衣は暫く唸っていたが「あつ、もしかして」と、何か思い当た

つたらしく、膝下に置いてあつた救急箱を取り出す。留め金を外し、箱の蓋を持ち上げる。

「えっと、コレだよね。手当の邪魔になつたから、取っちゃったんだけど」

結衣は訝しげに真つ白な布を観察しながら差し出してくる。

汚れない純白、厚さ一ミリ程度、半径三センチの輪。

間違いない。これは、俺が無くした物だ。

黒谷は結衣からリストバンドを受け取るのに、右腕を伸ばすようなことはせず。わざわざ身体を乗り出して左腕で受け取るとする。不自然な動作は、少なからず結衣の注目を引いてしまう。

その際右腕の二の腕から先が、力なく垂れたのを結衣は見逃さなかつた。

結衣は黒谷へと身を乗り出すように詰め寄る。黒谷は突然の結衣の行動に呆気にとられてしまい、身動きが出来なかつた。結衣は躊躇なく彼の右腕を掴む。その瞬間、強烈な違和感が結衣を襲つた。「つつ!?!」

驚きのあまりに無意識の内に、黒谷から距離を取ろうとしていた。変だ。あまりにも変だ。おかし過ぎる。

結衣が彼の右腕に触れた瞬間、彼の様子とは相反して右腕は微動だにしなかつた。普通、唐突に腕を握られるような状態に陥れば、人間はそれに対して無反応ではいられず、大小はあれども行動に出る。

腕を振り払う。

震える。

といった具合に。

それだけじゃない。彼はさっきまで怪我に苦しみ、熱を発散させるために汗を掻いていた。現に彼の額には数滴の汗が見えている。

しかし、右腕だけは違つたのだ。

発汗の消失

そして知覚消失、運動麻痺の三つから考え出される答えは一つ。彼の右腕には、抹消神経が存在しない。恐らくはあのリストバンドは、抹消神経を繋ぐ為の医療キットに違いない。

現実には余りにも悲惨で、結衣に想像以上の衝撃を与えた。何か言わなくちゃと思って、それを口に出すことで彼を傷つけてしまいたいそう、何も言えなくなる。安易に同情しない、受け入れると言っていた自分を殴ってやりたい。こんなの、こんなのって……ないよ。黒谷はそんな結衣の様子を見て、結衣が自分の状態を悟ったのだと理解し「……嫌なもの見せて、ごめん」と口に出していた。

黒谷は結衣から視線を逸らし正面を向くと、右腕の袖口を巧妙に捲っていく。二の腕辺りまで服を捲り終わると、そこには腕半分以上に渡る古傷が露になる。指先からリストバンドを通し、二の腕まで持ち上げると古傷を隠すように着ける。

純白の布が淡いライトブルーの光を発光する。黒谷は何度か右腕を持ち上げたり、右手の指先を開いたり、閉じたりしながら調子を確かめる。

誤作動はないようだ。

車内に重たい空気が流れる。息が詰まりそうになる。結衣はただ沈黙するしか出来なかった。彼の事を同情している自分では、この雰囲気を変えることは不可能だと悟ったからだ。

何分間、沈黙を貫き通しただろう。いや、まだたった数十秒かもしれない。体内時計が、まるでネジが外れたように壊れている。

そんな重たい雰囲気を消し飛ばしたのは、他でもない黒谷であった。

「祐介さん。俺、ここで降ります」

黒谷の突然の言葉に、祐介と結衣は思わず彼の方を見る。

「黒谷さん。そんな怪我しているんですよ！！ 病院に行かなくちゃ……」 「黒谷君、そんなに大怪我しているのに……」

二人は言葉途中で、それ以上何も言えなくなってしまう。

彼がどうしてそんな事を言ったのか理解してしまったから。

自分の所為で、居心地悪そうにしている二人を気遣ったのだ。彼の虚実な笑みが、物語っている。彼の微笑みは一見、もう自分は大丈夫だと。二人に告げているように感じさせる。だが、その奥底にはそんな明るさよりも悲惨な自己犠牲が隠れている。試験の時だつてそうだ。

自分一人が悪者になろうとした。彼等の敵意を、私から自分へと向けさせるように煽った。そうすることで、彼一人が馬鹿にされる代わり、私を助けてくれたのだ。

けれども、それは彼が持ち合わせる一面に過ぎない。彼だつて、本当は辛い筈だ。国中の人から批難され、罵られることに、平然と対処出来る訳がない。慣れられる訳がない。表面上では明るく振る舞つていようと、それは裏で辛い現実と戦っているのだ。

（だからこそ、私は決めたんじゃないのか？）

『本音で接し合える友達になりたい』

なら、こんな所で 彼の障害を知った程度で揺らぐ訳にはいかない。それがどうしたの？ と、堂々と胸を張って受け止めてあげられる度胸がなくちゃいけないんだ。

「なら、私も降りるよ」

結衣は二人に聞こえるよう、堂々とした口調で告げる。

黒谷と祐介は、それぞれ別種の驚きを浮かべている。

「仁田さん？ まだ、家の近くじゃ……」

「黒谷君を、家までは見送ってあげたくて」

「……えつと。俺の怪我を心配してくれているなら、大丈夫だよ？ これぐらいの怪我、慣れてるから」

その言葉は本心からきたものだろう。彼は私達とは違い、アグレッシブとの戦争では、最前線に立つ機会が多い。その分、怪我に対

する耐性も強いのだろう。事実、十数人に寄って集って袋叩きにされたにも関わらず、彼は存外平気そうにしている。

「だけど、それと、私が彼を送ることとは関係ない。」

「うん。でも、せめて家までは送らせて。目の前で傷ついている人を見過すような人間にはなりたくないから」

黒谷は困った表情を浮かべた後「うーん」と、少しの間考え込むように唸る。考えが纏まったのか、再び顔を合わせる。

「俺と一緒にいるとこ見られると、変な噂が流れるかもしれないよ。そしたら、迷惑が掛かるかもしれない」

「いい加減、彼の自己保身がウザくなってきた。」

彼自身としては、私の身を案じているのだろうが。私にとっては迷惑千万だ。

「私は全然構わないよ。そんなの言いたい奴に、幾らでも言わせて置けばいいのよ。それを一番知っているのは、あなたでしょ？」

黒谷君」

黒谷は結衣の口からそんな言葉が飛び出るとは思いもよらず、間抜けながらも呆気に取られる。

だが、その一言で黒谷を動かすには事足りた。

黒谷にとって結衣は学園でも指折りの美少女であり、あの事件を起こした自分が、生涯関わることもないと勝手に思い込んでいたからだ。しかし、彼女はいつの間にか自分を見透かした。堅く閉ざしている檻を打ち破ってくれたのだ。

気付けば、黒谷は表面上だけの偽り笑いではなく、本心から笑みを零していた。

「ああ。陰口を叩かれるのは、慣れっこだから」

「なら、決まりね」

結衣はそう不敵に微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9573z/>

Aggressive War

2012年1月10日23時45分発行